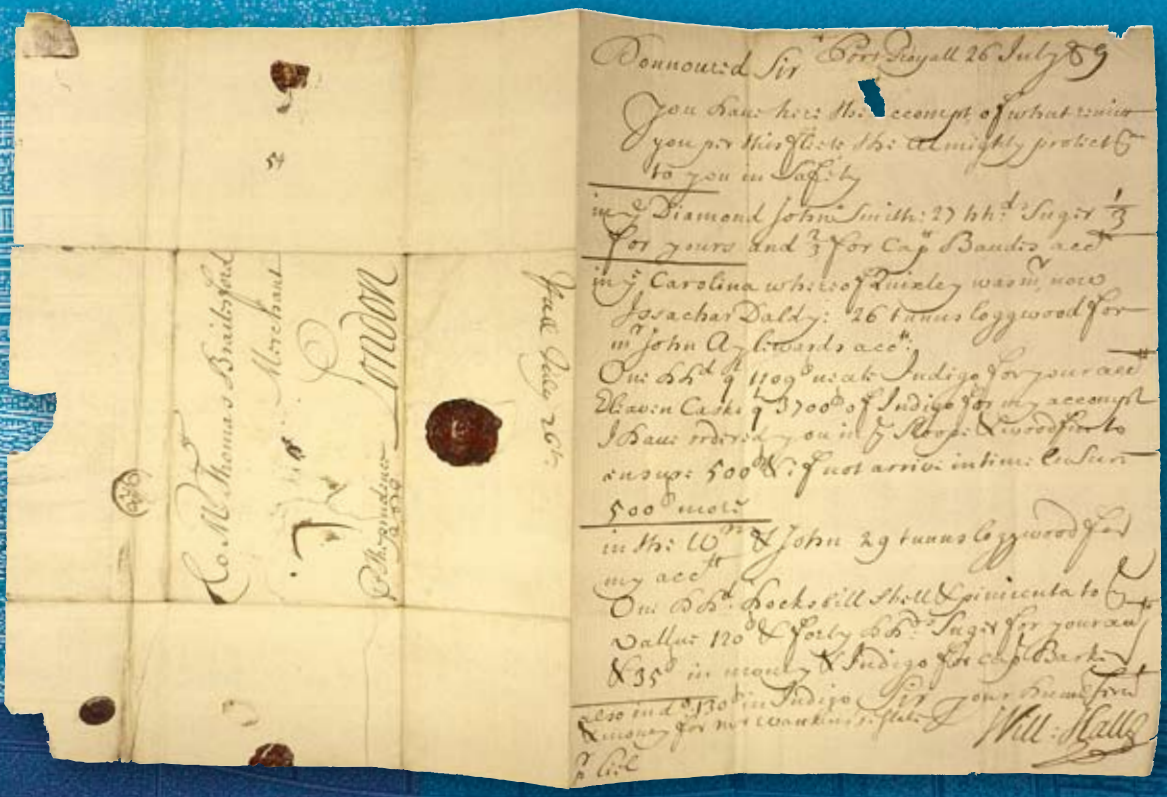
SITES II
HERSETEC
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration SITES II
Nagoya University, Graduate School of Letters. Global COE Program

GCOE NEWSLETTER

国立大学法人 名古屋大学グローバルCOEプログラム

テクスト布置の解釈学的研究と教育

2009.4
No.5



The National Archives

CONTENTS

海外派遣大学院生調査報告 …… 02
グローバルCOE論文賞 …… 04
グローバルCOE国際研究集会 …… 05
教育プログラム　2008年度講義科目の紹介 …… 06
研究活動　グローバルCOE講演会 …… 07
オープン・レクチャー …… 08
グローバルCOE研究員ブリーフィング …… 09
海外出張報告 …… 11
Report & Information …… 12

2008年度 海外派遣大学院生調査報告 第2回

グローバルCOEでは、「大学院学生海外派遣事業」の募集を年2回行い、博士後期課程の学生に対して、課程博士論文の執筆に必要な海外での調査を支援しています。募集に際して博士論文執筆計画および海外調査計画を提出してもらい、グローバルCOE学術委員会の下に設けられた選考委員会で応募書類を審査し、さらに面接を実施して支援する海外調査を決定しています。2008年度の第2回目の募集で採用されたお二方の報告書を以下に掲載します。

17・18世紀における北米植民地の船乗りと西インド貿易

イギリス

笠井俊和●文学研究科 西洋史学 博士後期課程2年

17世紀末、イギリス領ジャマイカの中心港ポートロイヤルは、地震によって崩壊するまで、カリブ海の一大貨物集散地として、本国・北米・アフリカから毎年百隻を超える商船を迎え入れていた。「海賊の楽園」としても知られる富める商港には、人口比にして同時代のロンドンよりも多くの現金が流通し、また、白人一人当たりの輸入額は北米最大の都市ボストンを凌駕していた。同港を訪れる船や商品の動きに関しては、これまで船舶の出入港記録である海事局船舶簿を利用して考察してきたが、それらが詳らかにするのはイギリス帝国内でのヒトやモノの移動である。しかし実際には、スペイン領植民地との密貿易が頻りにおこなわれたことは疑いなく、船舶簿ではポートロイヤルに入港しながらも出港を記録されていない船がかなりの割合を占め、それらの船が密貿易に関与したことが指摘されうる。

今回、そのポートロイヤルに代理人を置いて取引していたロンドン商人トマス・ブレイルズフォードの諸文書（1681〜94年）を調査・撮影するため、2008年12月11日から12月22日まで、ロンドンに赴いた。国立公文書館（The National Archives）に所蔵されるその文書には、中南米のスペイン植民地との取引の記録が書き残されており、特に書簡や船荷証券は、スペイン人と売買した商品や、非合法貿易に要する船員数などを明らかにする貴重な史料である。文書館ではこれらの文書をすべて撮影し、また、同時代の他の一次史料も数点入手することができた。同館の休館日には、大英図書館に足を運び、スペイン領の役人が密貿易の具体的な方法について記した18世紀初頭の書物の現物を閲覧し、マイクロフィルム化された本文を印刷させていただけたのは幸いであった。

いずれの史料も、帝国という枠組みを超えて大西洋世界のネットワークを解明するためには不可欠な手掛かりである。今後は、ブレイルズフォードの文書と海事局船舶簿に記された情報とを照合し、たとえば、文書に記されたスペイン領との取引が、船舶簿にはどのように記録されたか、あるいは記録されていないのか、また、非合法貿易に従事する船長が合法貿易にも携わっているのかどうかなど、入念なクロスチェックを試みたい。ブレイルズフォードの文書は、これまでイギリス帝国の公的な貿易の史料とされてきた船舶簿を、その矛盾点が密貿易の存在を明るみに出すテクストへと変質させられる可能性を秘めている。

エルフリーデ・イェリネク初期作品における言語の複数性の意義

オーストリア

福岡麻子●文学研究科 ドイツ文学 博士後期課程3年

2009年3月1日から3月24日の期間、資料収集、研究者訪問等のため、ウィーン大学及びウィーン市内の各施設を訪れた。

2004年ウィーン大学に創設されたイェリネク研究センターには、研究書、研究論文、イェリネクにかかわる新聞記事、上演作品のビデオなどあらゆる資料が収集されている。筆者はセンターにて、イェリネクにおいて大きな役割を持ちながら、論じられることのまだ少ない〈言語と身体像の関連〉というテーマにとって重要な、また日本では入手困難な資料を提供してもらうことができた。研究員のクリスティアン・シェンカーマイアー氏は快く面談に応じてくださり、イェリネク演劇における言語と身体の関係性をはじめ、イェリネク諸作品の背景となっている事項、オーストリアのメディア環境（極左的なテレビ番組など）についてお話しいただいた。アクチュアルな事象に反応することがイェリネク作品の一つの特徴・意義であるなか、日本でそれらの出来事をアップトゥデートに追っていくのは難しく、それらについて少しでも知ることのできた貴重な機会となった。

センター長でイェリネク研究の第一人者、ピア・ヤンケ教授も、毎週のオフィスアワーに訪れることを快諾くださり、筆者の研究テーマについて指導いただいた。またその際、作品を取り巻く環境に触れるため、イェリネクの住む地区、彼女のよく訪れていたカフェなどを教示いただき、作品に直接的・間接的に描かれるウィーン各所の雰囲気を経験できたのも大きな収穫の一つである。

イェリネクの最新演劇“Kontrakte des Kaufmanns”はケルンで初演されるが、その演出家でイェリネク演劇をいくつも手がけてきた（そしてイェリネク本人とも信頼・友人関係にある）ニコラス・シュテーマンは、ウィーンでその〈朗読〉を催した。テクストを編集せずにすべて舞台に乗せる、第一にサイズの点で異例の〈朗読〉は4時間半にもわたった。朗読は複数の俳優によって行なわれ、音楽や衣装、さまざまなアクション、コーラス的な読みによって、書かれた言葉が身体化されるための多様な企みを観察することができ、〈言語の複数性〉をテーマとする本研究にとってまたとない機会となった。

イェリネクをはじめ、ゲーテ、ジジェクなどのテクストを織り交ぜてつくられた、クリストフ・シュリンゲンジーフの「レディメイド・オペラ」、“Mea Culpa”が3月20日に初演され、それを鑑賞できたことも収穫である。テクストだけでなく、ワーグナーをはじめとする〈ドイツ〉音楽のコラージュ、ブルク劇場という伝統劇場で、さまざまな国籍・肌の色の役者（中には、シュリンゲンジーフがレストランでスカウトしたという素人の老夫婦も混じっている）がつくる世界は、ボリス・グロイスが示唆するような〈矛盾〉を暴露する作業が生み出したものであり、引用のコラージュを専売特許とするイェリネクの作業とスタンスを共有する。そのような意味で、複数的なものとしての世界・テクストが〈オペラ〉という（これもまた注釈の多く必要な）形として現実化された作品を見ることができ、本研究にとって大きな示唆となった。

他には、国会議事堂における「1918／2008」展（第一次大戦から現在までのオーストリアの歴史展）、ユダヤ人博物館を訪れ、イェリネクの社会批判的なスタンスを条件づける〈オーストリア〉の歴史、またその提示のされ方を知ることができた。さらに朗読会にも訪れ、現代文学のあり方の一端に触れ、司会者に話を聞くこともできた。今回の滞在で物理的・経験的な意味で資料収集ができたこと、舞台に乗せられた形のイェリネクのテクストを〈読む〉ことができたことを基に、今後も研究を進め、課程博士論文ではさまざまな〈テクスト〉が相互に条件づけあって成り立つものとしての〈テクスト〉がイェリネクにおいて持つ一つの意義を示したい。

Global COE
グローバルCOE論文賞
2008年度第2回

文学研究科グローバル COE プログラムでは、博士後期課程に在籍する大学院生の優れた論文を「グローバル COE 論文賞」として顕彰し、プログラムの研究論集『HERSETEC』に掲載します。2008年度第2回の募集は2月27日に締め切られ、多くの応募の中から以下の論文が採択されました。「グローバル COE 論文賞」に応募するためには、グローバル COE 授業科目「テクスト布置解釈学原論」または「テクスト布置解釈学各論」を受講していることが必要となります。

福岡麻子（博士後期課程３年）

初期エルフリーデ・イェリネクにおける言語の複数性
――1970–80年代　女性の書く主体を解体する試みの一例――

【講評】 本論文は、オーストリアの女流作家イェリネクの初期の作品に関して、テクスト、政治思想そして論者が「言語の複数性」と呼ぶイメージの交錯を野心的に論じたものである。1970年代から80年代にかけてのイェリネクは、マルクス主義とフェミニズムの立場を取っており、従来の研究はそのような方面から主として論じられてきたという。論者は、このような先行研究の趨勢に対して、イェリネクがオーストリアのユダヤ文化から受け継いだとされる言葉遊びの多用に着目して、「政治的な作家」としてのイェリネクの既存の姿を、彼女の単純ではない自作品への発言と併せて解体しようとする。特に論者が留意するのは、言葉の意味よりも形や音に重心を置いたり、視覚的効果を狙った文章配置や男女の役割に関する保守的で陳腐な言辞を意図的に押し出す「皮肉」の効果など、異和感を読者に与える複雑な作者の戦略を摘出している。特に広告媒体と写真に現れる「女性」への彼女の視線と独自の表現を論じた後半の分析は、イェリネクが政治思想を超越して高い評価を受けた根拠を如実に照らし出している。現代文学と対峙する論者の誠実な姿勢が印象的である。ただ、論点が作者とフェミニズムとの関わりに絞られている点が惜しまれる。今後の課題であろう。

釘貫 亨（グローバル COE 教育担当サブリーダー）

山下英夫（博士後期課程１年）

Monstruosité dans *Madame Bovary* de Gustave Flaubert. Etude génétique

【講評】 本論文は、フローベールにおける怪物性というテーマに着目して、作家がこのテーマについて意識していた形跡を書簡や初期作品といったさまざまなテクストの分析を通して明らかにし、ヒロインのエマや薬剤師オメが、有限な人間存在と広大な汎神論的な宇宙愛という二つの極の間に引き裂かれている近代人の運命のなかに書き込まれていることを論じた力作である。近代人は、一方では科学の進歩による自然の征服という傲慢に陥り、自らを超える一切のものを否定しようとする。みずから神の座を簒奪しようとする人間中心主義を体現したオメは、名誉勲章受勲を目指して次第に異様な怪物的存在と化していく。エマもまた自由平等という民主主義的理念のなかで芽生えてくる羨望ゆえに、怪物性を帯びてくる。本論文は、一見すると対照的な二人の作中人物がともに近代社会の産み落とした怪物であることを明らかにし、この構造が初期作品から一貫して見られることを指摘して、怪物性の主題の重要性を浮き彫りにすることに成功している。ただし、怪物性のより厳密な規定が、「グロテスク」や「凡庸」といったフローベール的主題との関連で今後追究されなければならないであろうし、参考文献の引用などに若干の不備が認められる。しかしながら、これまで論じられることのなかった怪物性の主題を発掘し、テクスト布置に留意しながら新たな解釈を目指した点は高い評価に値しよう。

松澤和宏（グローバル COE 教育担当サブリーダー）

グローバル COE 国際研究集会

GCOE 第5回 国際研究集会

知のテクスト化

2009年3月5日(木)—7日(土)
パリ東大学、国立図書館リシュリュー館(フランス)

3月5日にパリ東大学マルヌ・ラヴァレキャンパスにて、パリ東大学と名古屋大学との全学間学術交流協定および学生交換協定が山本進一理事の立ち会いのもと、リクテンベルジェパリ東大学長の署名により締結された。この締結と併せて、パリ東大学の研究グループ「文学・知・芸術」と文学研究科グローバル COE プログラム「テクスト布置の解釈学的研究と教育」との共催による国際シンポジウム「知のテクスト化」が、認識論的批評の第一人者モントリオール大学ピエールサンス教授の講演によって開幕した。この国際シンポジウムには、カナダ、アメリカからの発表者も含め約30名が参加して、文学テクストに同時代の科学をはじめとするさまざまな知がどのように組み込まれ、いかなる意味や文体上の効果を生んでいるのか、というテーマを軸に充実した発表と白熱した議論が交わされた。松澤和宏教授はフローベール『ブヴァールとペキュシェ』において語られる教育の失敗の物語が、知の伝達を保証してきた権威の喪失を浮き彫りにしていることを明らかにし、鎌田隆行講師はバルザック『人間喜劇』の序文における知の問題を草稿にあたって克明に分析した。またフォヴェルグ外国人教師はフローベールにおけるライプニッツ受容の問題点を初めて明らかにし、永田道弘研究員はフーコーのルッセル論を草稿研究に基づいて批判しつつアフリカの表象という新たな解釈の地平を提示した。共有する問題を論じ合うことで親睦を深める機会ともなり、実り豊かな3日間となった。

コーディネーター: ジゼル・セジャンジェール(パリ東大学教授)
松澤和宏(文学研究科教授)

GCOE 第6回 国際研究集会

歴史テクストの解釈学 針路、解釈実践、新たな諸問題

2009年3月7日(土)—8日(日)
東京国際フォーラム

去る3月7日と8日の2日間にわたって東京国際フォーラム、ホール D5を会場として、グローバル COE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」の第6回国際研究集会が開かれた。今回の主題は「歴史テクストの解釈学——針路、解釈実践、新たな諸問題」と題され、海外からの招聘報告者も含めてヨーロッパの中世の歴史記録を主な対象とする11のペーパーが読まれ、活発な質疑が繰り広げられた。東京での研究集会の開催は初めてであり、どれほどの参加者が足を運んでくれるかやや不安もあったが、西洋中世の文書、歴史記述、図像の高度に専門的なテーマであるにもかかわらず、事前の登録参加者が北は北海道から、南は九州まで100名近くを数え、大きな成功を収めることができた。その大きな原因は、海外から招聘した講演者の豪華な布陣である。オクスフォード大学のクリス・ウィッカム教授は、50代後半の目下世界の中世史学者の頂点に立つ存在であり、その夫人レズリー・ブルベイカー バーミンガム大学教授は、ビザンティン美術史の第一人者である。またパリから参加したパリ第一大学教授レジーヌ・ル・ジャン教授は中世初期貴族研究の専門家で、夫君のフランソワ・ムナン パリ高等師範学校教授は、中世イタリア・ロンバルディア封建社会研究の泰斗である。ベルギーからは、この国の中世学界の風雲児とも言うべきナミュール大学のエチエンヌ・ルナール博士が加わった。さらにパリ第四大学のスミ・シマハラ講師は、中世聖書註釈学の新進気鋭で、将来のフランス中世史学界を担う逸材とされている。当日の参加者の圧倒的多数が、わが国の若手の研究者で占められ、多くの質問が彼らから発されたことは、私どもの狙いにまさしく合致しており、その点でも極めて意義深い研究集会であった。

コーディネーター:佐藤彰一(文学研究科教授)

講義科目の紹介

グローバルCOEプログラム「テクスト布置の解釈学的研究と教育」では、「テクスト布置解釈学原論」と「テクスト布置解釈学各論Ⅰ～Ⅶ」を開講し、2008年度博士後期課程入学者から各2単位の修得を義務化しています。ここでは2008年度後期に開講した授業の内容を紹介しています。また、グローバルCOEプログラム授業科目の履修は、「グローバルCOE論文賞」および「大学院学生海外派遣制度」に応募する際の条件となっています。

テクスト布置解釈学原論

2008年12月24日㈬・25日㈭、2009年1月8日㈭・9日㈮

松澤和宏 教授（フランス文学）

人文学が研究対象として措定するテクストは、孤立して存在するものではなく、他の諸々のテクスト群と複雑な諸関係を明示的暗示的に結んでいる。この諸関係は解釈の営みを通して一定の布置として顕在化してくる。前テクスト、間テクスト、メタテクスト、パラテクスト（アルシテクスト）との複合的な諸関係の結節点として当該テクストは存在しており、こうした布置の総体を広義のテクストとして捉えるべきである。テクストは複雑多様な文脈を背負い、かつ新たな解釈に開かれた潜在的可能性を蔵している。

テクストはそれを読解の対象として措定するメタテクスト的操作を抜きにしては存在しえず、かかる操作は解釈者の問題関心に由来し、先導されている。研究対象としてのテクストばかりではなく、解釈者自身もまた、社会的歴史的コンテクストのなかに身を置いており、問題関心をあらかじめ自らが所属する文化的社会的歴史的な先入見の総体によって方向づけられている。先入見のおかげで過去のテクストの継承や研究が可能となるのであり、したがって先入見とはそこから解放されねばならない単なる桎梏ではなく、偏見と叡知のアマルガムである。先入見の総体は言語テクストとしては対象化しきれない性質のものであり、広大かつ深遠な暗黙知にむしろ属する。テクストは相異なる先入見を蔵した著者の地平と読者の地平が遭遇し、そこで対話が繰り返し試みられる場として考えられよう。したがってテクスト布置の解釈学は、解釈者がつねにみずからの問題設定や先入見そのものを吟味反省するという自己理解と自己批評の側面を孕むことになる。

テクスト布置解釈学各論

各論Ⅴ 思想・哲学テクスト

重見晋也 ● 本講義では、テクストの存在様態についての考察を先行研究に遡って検討し、さまざまな分野における研究対象としてのテクストへの可能なアプローチを探ることを目的としたものであった。検討対象とした先行研究は、M. フーコーの『知の考古学』、P. リクールの『時間と物語』、ナラトロジー理論、ガダマーの『真理と探究』であった。

フーコーにおいては、「ディスクール／エノンセ」の区別を基礎として一つ一つの「エノンセ」の集合総体として「ディスクール」が定義づけられており、テクストとしての存在様態は「ディスクール」の存在様態に等価なものとして考察されていることを確認した。また、問題点として「ディスクール」が「エノンセ」を構造化していく基準が非常に曖昧であることも確認した。

リクールにおいては、独自のミメーシス過程の考察の中で、3層に重層化した3つのミメーシス段階が作者から読者へのコミュニケーション過程において、作者から発せられたテクストが線状的に処理されていくことを確認した。こうした考え方によって、テクストの持つ意味の重層化という側面は説明できるものの、ここのミメーシス過程の役割がしばしば曖昧になっているという問題も確認した。

一方で、ナラトロジー理論ではコミュニケーション過程は捨象されて、テクスト内の構造分析として自律するテクスト概念が形成されたが、学説史的にはそうした自律構造が批判され、テクスト外の要素を取り込んでいったことを確認した。

ガダマーにおいては、テクストの内的要請が重視され、主観主義的な相対主義を回避するような、イデア的存在としてのテクストが前提となっていることを確認した。

以上の考察から、ガダマー的解釈学の持つ非−相対主義的な側面をテクスト構造あるいは理解プロセスとして基礎付け、それらがコミュニケーション過程の中でどのような役割を持つのかについて、個々の研究領域毎に具体例を取り上げながら検討していくことが必要であると確認した。

各論Ⅵ 言語テクスト

ゼーン・ゴーベル ● 本講座では、テクスト布置の解釈学的研究から得られる知見を、国際的な状況における英語による研究発表へと応用する。とりわけ、大学院生がテクスト間の幾つかの関係を理解する手助けをする一方で、彼らにそれらの理解を自らの研究の準備と口頭発表を通して応用する機会を与える。授業では二つの主要なテクスト間関係を検討する。一つは、学生自身の学問的背景から来る前テクスト（つまり自らが専攻する分野における理論や方法論に関する知識）とメタ・テクスト（つまり、研究上の疑問への適用を介した、それら前テクストに対する自らの解釈）の間の関係である。もう一つは、これらのメタ・テクストがパラ・テクストあるいはジャンルとして表現され得る方法に関するものである。たとえば、パラ・テクストは要約、研究報告書、雑誌論文、学術書、学会発表等の形を取り得る。学生は次に解釈学的テクスト布置に関する理解を、自らの分野における研究上の基礎（つまり前テクスト）を検討することで応用する。この過程を経ることは、学生が学問的な知識の基礎にある隙間を見つけ出す助けとなる一方で、そのような知識の基礎の解釈にも寄与する。手短に言えば、学生が次いで二つの異なる種類のパラ・テクスト――たとえば、自らの現在の研究計画の要約や口頭発表――として再文脈化し得るメタ・テクストを形成することである。

グローバル COE 講演会

カイサリアのエウセビオスとシリア語キリスト教文学

2008年12月18日(木)
14時40分―16時30分

戸田　聡（一橋大学非常勤講師　古代キリスト教史・東方キリスト教文学）

古代末期、東方キリスト教圏の各地では、キリスト教の伝播に伴って現地語が文学言語化を遂げた。その際の重要な推進力として、各現地語への聖書の翻訳が挙げられる。

それら現地語文学の中で最も古くから存在するのはシリア語文学である。元来メソポタミアの都市エデッサを中心として使われた言語であるシリア語は、次第に広範囲で用いられるようになり、3世紀から13世紀さらにそれ以降に至るまで、シリア語キリスト教文学は（翻訳もオリジナルの著作も含めて）多くの作品を生み出した。

古代キリスト教史研究との関連では、特にシリア語キリスト教文学の最古の段階が重要であり、それに属する作品として『トマスによる福音書』『ソロモンの頌歌』などが挙げられるが、これら著作については、その著作原語がギリシア語かシリア語かをめぐって学者の間で決着がついていない。しかもエデッサという町が、早い時代からギリシア語とシリア語の両方がともに通用する、文化的多様性を許容する地域だったと理解されているため、研究の現状では、単に言語的な説明から著作原語の決定を図ることは困難な状況にある。そこで本講演では、『教会史』の著者であり、かつシリア語キリスト教文学に多大な関心を寄せていたカイサリアのエウセビオスの証言を基に、同じく著作原語の問題が年来議論されてきたタティアノスの『ディアテッサロン』について、問題の再考を試みた。

キルデリクス（481年没）とクローヴィス（511年没）―歴史、考古学、文書作成―

2009年2月23日(月)
14時―15時20分

アラン・ディールケンス 博士（ブリュッセル自由大学教授　初期中世ヨーロッパ史）

九州大学文学部岡崎敦准教授の招聘により来日したブリュッセル自由大学教授アラン・ディールケンス氏の講演会が、2月23日（月）午後2時より名古屋大学文学部大会議室で開催された。「キルデリクス（481年没）とクローヴィス（511年没）―歴史、考古学、文書作成―」と題された講演は、文字記録と考古資料とを付き合わせながら、メロヴィング朝の基礎を築いたこの二人の王の姿を浮かび上がらせるとともに、史料の不足ゆえに闇に包まれたこの時代に新たな光を当てる可能性を有する資料として印章付き指輪を取り上げるものであった。われわれにとって興味深かったのは、次の二つの主張である。第一に、トゥルネで発掘されたキルデリクスの墓から知られるその埋葬形態（墳丘型 tumulus、馬の供犠）が中央アジアで広まっていた慣行と類似しており、この事実が他の史料から知られるキルデリクスの東方への追放と関連づけられる可能性である。第二に、メロヴィング期から数多く残る印章付き指輪の中でも最近発見された二点の証拠が、金の組成や銘文の書体や図像の様式から申し分なくメロヴィング期の遺物と推定されるにもかかわらず、偽造の可能性が高いとする主張である。この時期の考古学遺物に通暁したディールケンス教授ならではの判断である。講演後は、この第二点目を中心に活発な質疑応答が交わされ、1時間の質疑の時間が短く感じられた。

加納 修 准教授（西洋史学）

オープン・レクチャー

研究成果を社会に広く還元することを目的として、名古屋大学文学研究科グローバルCOEプログラムでは21世紀COEプログラムに引き続き「オープン・レクチャー」と題する公開講座を開催しています。毎月1回水曜日の18時から、グローバルCOEが名古屋国際センタービルの15階に開設しているグローバルCOEオフィスで、「テクスト布置解釈学」に関連するテーマでの講演を、事業推進担当者の先生やその他の先生がレクチャーします。参加は自由です。毎回の題目などはWebサイトでお知らせしています。本号では2008年12月以降に開催した3回の要旨を紹介します。

第14回 啓蒙時代の自然と人間——「科学革命」と宗教のかかわりをめぐって

2008年12月10日(水) 18時—19時

長尾伸一 教授（経済学研究科・経済学史）

かつて18世紀の啓蒙時代は、科学的な思考に基づいた「理性の時代」であり、現代人の考え方の基礎をつくった原点とされてきた。とくに17世紀科学革命の集成ともいえるニュートン体系は、啓蒙の科学の中心として、思想的に絶大な影響を与えてきたといわれてきた。

ニュートン主義は真空中を動く粒子の表象と機械論によって、啓蒙の基礎となる合理化された科学的世界像を提供し、それによって近代的人間観を生み出したと考えられてきたが、その自然科学以外の知の領域での展開は、ニュートン主義による世界の数学化、内在化、合理化、経験化などを指摘した、M. ホルクハイマー、T. W. アドルノの『啓蒙の弁証法』、E. カッシーラーの『啓蒙の哲学』、P. ゲイの『自由の科学』などの射程に基づいていた。だが1970年代以後、M. C. ジェイコブやS. シェイピンらエディンバラ学派などによって科学革命の見直しが進み、それまでの近代像とは異なった科学と宗教や政治の結合が指摘されてきた。また国際18世紀学会などで進む啓蒙研究の精緻化は、非西欧世界を含め、啓蒙の全体像をより多様性に富んだ形で示しつつある。これまで社会科学生誕の地の一つである18世紀スコットランドを中心にイギリス・ニュートン主義を研究し、『ニュートン主義とスコットランド啓蒙』、『トマス・リード』などで、自然と道徳世界を包括する観念複合体としてニュートン主義を描いた。ニュートン体系は宇宙の恒常的な秩序を論証するとともに、神の作用因としての積極的なそれへの介入を主張し、イギリス独特の神観念と経験論哲学、科学方法論の共存を可能にした。それによってニュートン主義はキリスト教的な枠組みの中で道徳を科学的に研究することを可能にしたのである。

本講義では以上の点を、ニュートン体系の根幹である1万有引力の法則および2地動説について、実例を挙げて検討した。

第15回 源氏物語と後宮文化

2009年1月14日(水) 18時—19時

高橋 亨 教授（文学研究科・日本文学）

なぜ平安朝に『源氏物語』のような女性作家による文芸が開花したのかについて、「後宮」という視点から考察した。後宮は日本の規範となった唐（中国）をはじめアジアに広く存在したが、平安朝の後宮には「宦官」がおらず、男子禁制でもなかった。それが、光源氏と藤壺との密通により生まれた皇子が天皇となるという『源氏物語』のような作品を生む基盤であった。

また、女文字とよばれた「かな」文字の成立が、王朝女性文学を生むことにつながった。こうした視点からは、李氏朝鮮におけるハングルと後宮女性文学との比較が有効である。とはいえ、李氏朝鮮の後宮女性たちの日記文学的な活動は例外的であり、平安朝の女性作家たちによる和歌や日記や物語のように自由ではなかった。

紫式部や清少納言などは、厳密な意味では後宮の女官ではなく、中宮（皇后）に仕えて摂関家と宮中とを出入りする女房であった。王朝女性文学を生んだ日本の歴史社会的な文化コンテクストとして、摂関（国母）政治と私的な文芸サロンがあった。

こうした論点から、『源氏物語』というテクストの物語内容と物語表現にわたる特性を検討し、作者〈紫式部〉についても考察した。江戸時代に描かれた画帖や屏風の源氏絵や歌仙絵などの絵画テクストも用いて、楽しいテクスト学を試みた。

第16回 アリストテレス哲学の「発見」と中世初期ヨーロッパ

2009年2月18日(水) 18時—19時

佐藤彰一 教授（文学研究科教授・西洋史学）

2008年3月にパリの定評ある出版社スイユ社から刊行された1冊の書物は、やがてその内容の妥当性ばかりでなく、著者のイデオロギーと、政治的立場をめぐってフランスで大きな論議を巻き起こした。その書物の題名は『モン・サン・ミシェルのアリストテレス』、著者は中世ヨーロッパ史の専門家で、リヨン高等師範学校教授のシルヴァン・グーゲネムである。古代ギリシアの知的遺産がどのようにして中世以降のヨーロッパに継承されたかという問題は、これまで「12世紀ルネサンス論」という文化史上のトピックとして論じられてきた。なかんずく、近代哲学の先駆であったスコラ学の淵源となったアリストテレス哲学が、いかにして中世ヨーロッパに浸透したかについては、アメリカ合衆国のチャールズ・ホーマー・ハスキンズの所説が定説として君臨している。すなわち、西ローマ帝国崩壊後に西ヨーロッパは文化的に衰退し、古代ギリシアの知的遺産、とりわけアリストテレスの『自然学』をはじめとする最重要の作品は忘れ去られた。それがヨーロッパで再び陽の目を見たのは、1085年にキリスト教徒がトレドを奪回し、トレド大司教ライムンドゥスのイニシアティヴによって、アラビア語文献のラテン語への翻訳活動が精力的に行われ、その成果としてアリストテレスはヨーロッパに甦ったとする主張である。グーゲネムはこの定説に根本的な異議を唱え、トレドの翻訳センターが活動する数十年前に、すでにベネツィアのヤコブスという修道士の手で、モン・サン・ミシェル修道院で、『自然学』の翻訳が完成していた事実（この写本は現在同修道院の所在地に近いアヴランシュ市立図書館に収蔵されている）、さらにはそもそもアリストテレス哲学を初めとして、古代ギリシア哲学がヨーロッパの知的景観から姿を消したことは一度もなかったとする極めてラジカルな議論を展開した。

グーゲネムの書物に対する一部の激しい反発には理由がある。とりわけ第4章「イスラームと古代ギリシアの知」、第5章「文明の問題」、結論「アポロンの太陽が西洋を照らす」は、学問的な議論の規矩を甚だしく逸脱したものとの印象を拭えない。こうした大きな欠陥を抱えた書物ではあるが、文化史の面からは、古代ギリシアの知が通説の言うように、果たして西洋中世から失われてしまっていたのか、この点を史料に即して再検討を促す刺激をもたらしたという学問的意義は否定できない、というのが報告者の結論である。

グローバルCOE研究員ブリーフィング ④

グローバルCOEポスト・ドクトラルの研究員は、個別の専門領域で扱っている研究対象をテクスト布置解釈学の枠組みで捉え直すべく、名古屋国際センターのグローバルCOEオフィスを中心に研究活動を行っています。研究員たちの研究成果は「研究員ブリーフィング」と呼ばれる事業推進担当者と研究員が集う場で議論され、研究論文へと結実していきます。

金銀珠 ● 中古語の主格助詞「の」と述語の名詞性

平安時代の日本語（以下、中古語と称する）における主格助詞「の」は、(1)のような主名詞が顕在する連体節、(2)のような連体形がそのまま名詞句として用いられる準体節、(3)のような用言の連体形が主節の述語である文、(4)のような接続節、のような構造で主語を表すことができる。

(1) 月のをかしき夜（源氏物語）
(2) 御達のとまりたりけるも、（落窪物語）
(3) あこぎといふ盗人の、かく人もなき折を見つけてしたるなり。（落窪物語）
(4) 音のしはべりつれば、（宇津保物語）

主格助詞「の」に関しては、すでに多くの研究において「が」との比較を通してその歴史的な展開が論じられている。その一方で、上記のような「の」が用いられる構文自体の研究は乏しく、「の」が現れる句全体の特徴なり差なりを総体的に観察し、観察された諸特徴がどのように有機的に関連し、何を意味するのか、という視点から論じたものは管見の限り見当たらない。本発表では、まず、助詞「の」が主語を表す上記の構造を、特に述語部に注目し、述語が表す意味、形態、統語的性質を観察した。さらに、述語がもつ名詞的な性質という観点から、観察された諸現象を名詞述語の意味、形態、統語的性質と比較し、「の」の後の述語が名詞述語がもつ性質に接近していると論じた。しかし、述語がもつ名詞性の定義をはじめとして、全般的に体系的な説明をしなければならないところが多く、現段階での中間報告となる。

小林 智●司法の近代化と自律的法解釈の条件整備

近代法秩序は、自律的に法解釈を遂行する主体の系統的な産出を前提とする。それにより、権力作動の安定性が確保されるのである。裁判官のあり方は、とくにここで要請される法解釈実践の範型をなす。

日本の近代的司法制度確立期についてこれを見れば、当初、大審院設置以降、制度的には司法を担う機構が整うが、人的には官立学校による法曹養成だけでは量的に不十分であった。この過渡期的段階では、司法省・大審院による裁判干渉が行われた。

その後、公教育制度と資格試験制度が接続されると、大規模な私立法律学校が出現し、これが自律的法解釈主体を産出する装置として機能することになる。

裁判所構成法による裁判官の職権の独立によって、自律的法解釈主体による司法の条件が整った。同時期に起きるいわゆる老朽司法官淘汰問題は、新世代と旧世代との交代を意味するものであった。そこで求められたのは、自身の信念に基づく責任ある法解釈を行う資質である。

小澤 実●日本におけるヴァイキング社会像の受容と解釈

ヴァイキングが実際にどのような集団であったのか、学者によって必ずしも統一的な見解があるわけではない。その理由は、ヴァイキング像を生み出す学者の拠る学問伝統、イデオロギー、そして史料の性格がそれぞれ異なることにある。したがって、どの地域に軸をおくかによって、演繹されるヴァイキング社会像は大きく異なる。

日本におけるヴァイキング社会像（＝北欧中世像）の基礎は、山室静（1906–2000）と荒正人（1913–79）が築き、その後、北欧に関心を持つ歴史学者も徐々に増えた。しかしながら多くは、ヴァイキングが実際に生きた時代からは隔たった中世アイスランドの史料に基づいてその社会像を練り上げた。発表者は、アイスランド社会のあり方をヴァイキング社会に投影する従来の作法に批判的であり、内外の同時代史料が比較的多いデンマークを対象としてヴァイキ ング社会像の再構築を図ることの利を確認した。

永田道弘●Procédé et/ou processus ── レーモン・ルーセル『アフリカの印象』の生成をめぐって

言語の形式的構造からルーセルを評価する従来の批評は、「手法（プロセデ）」を強調するあまり、ルーセルをルーセルたらしめている奇想がいかにして生まれたか十全に説明していない。「プロセデ」だけで物語の奇矯さの形成すべてを説明することが不可能である以上、物語内容のレベルで働く創作方法を作品の生成プロセスから見出す研究があってしかるべきである。

今回のブリーフィングでは、『アフリカの印象』を同時代のアフリカを題材とした通俗小説のパロディと考え、生成批評の外的生成／内的生成の概念を用いながら、草稿の改訂過程での先行テクストに対する模倣・変形操作のプロセスを検証した。特に黒人王の人物像に焦点をあて、パロディの対象として外部から取り込まれたアフリカの通俗的表象が、執筆を通じて作品の内在的論理によってどのような変容を蒙っていくのかを分析した。このような生成プロセスの分析を通じて明らかにされたものとは、「プロセデ」とは別種の創作方法――作品の外部から紋切型ないしは個人的嗜好に合致するイメージを取り込んで複数のエピソードをつくり、それらを言わばコラージュのように結びつける――であった。通俗的な黒人王の物語に、それと同時並行で書かれた別の物語（女装した白人歌手の幼年期の物語）から抽出した要素をはめ込むことで、二つの物語系列を融合しつつ、そのどちらにも属さない第三の系列の物語が作り出されたのである。この新たな物語性の特権的象徴が「女装した黒人王」の形象である。黒人王以外にも、西洋人でもアフリカ人でもあるような、男でも女でもあるような、既成の価値体系によってはアイデンティファイすることが不可能な倒錯的人物が多く登場する。これらの人物の造形にあたって、ルーセルは、性差や人種といった、文化が割り当てた属性や役割を遊戯的に撹乱している。彼のこのような身振りは、結果的に、同時代の通俗小説に内在する西欧中心主義的イデオロギーに対する一種の批判にもなりえていると考えられよう。

海外出張報告

ハンニバル戦争とスペイン東海岸の古代遺跡群

小川正廣

2009年1月1日から1月11日の旅程でスペインに出張し、古代ローマ叙事詩の歴史的コンテクストに関する調査を行なった。ローマ帝政期の作家シリウス・イタリクス（Silius Italicus）による古典ラテン叙事詩『ポエニ戦記』（“Punica”）は、将軍ハンニバル率いるカルタゴ軍とローマ軍が地中海支配の雌雄を決した第二次ポエニ戦争という歴史的題材を扱っているが、現実の歴史的文脈との対応や関連がテクスト解釈上の重要な問題となっている。とりわけこの戦争の発端となったハンニバルによるサグントゥム攻略の描写は、叙事詩の伝統的なモチーフや技法を集中的に用いており、ドラマチックな文学的叙述に仕上げられてはいるものの、しかしローマの対ヒスパニア政策とその歴史的経緯を踏まえて考察すると、帝政初期の対外政策の微妙な問題とからむ点が少なくない（この点は、同じくサグントゥム陥落に重点を置きながらも、共和政末期の状況下で記述されたリウィウスの歴史書『ローマ建国史』とはやや異なっている）。

今回の旅行では、第二次ポエニ戦争以前にローマとカルタゴ間の協定により勢力境界線と定められたエブロ川の以北と以南の主な古代遺跡と考古学博物館を訪問し、第二次ポエニ戦争当時の前３世紀後半とポエニ戦争後に属州化された時点から帝政初期までの歴史的状況の変化に着目しながら調査した。エブロ川以北では、エンポリアエ（現エンプリアス）、タラッコ（現タラゴナ）、デルトーサ（現トルトーサ）、以南ではサグントゥム（現サグント）、イレタとルケントゥム（現アリカンテ）の遺跡群、およびエンプリアス、バルセロナ、タラゴナ、サグント、アリカンテの考古学博物館が主な訪問先である。日程の関係上、残念ながらヒスパニアでのハンニバルの本拠地カルタゴ・ノウァ（現カルタヘナ）までは行けなかったが、しかしそこに近いアリカンテの遺跡とヨーロッパ有数と言われるその考古学博物館では、エブロ川以南のカルタゴの勢力とポエニ戦後のローマ化の状況を詳細に観察することができた。今回の最大の関心対象はもちろん、エブロ川以南のカルタゴ勢力内に位置するにもかかわらず、ハンニバルが攻略に半年以上も費やしたというローマの同盟都市サグントゥムである。たしかに、河口付近の低地に聳える高い丘の上にめぐらされた前５世紀にさかのぼるという堅牢な石の城砦は、容易には攻め難いように見える。しかし、はたして世界史上に名を残す天才的軍事家ハンニバルがそれほど手こずるような難攻不落の地形かというと、やはり大いに疑問に思えてならない。おそらくサグントゥムに関するこうした政治的・地理的両面でのあいまいな事情に、ハンニバルから見ればカルタゴ領内のローマ同盟都市をめぐる政治的思惑が、また帝政期のローマ作家イタリクスからすると、ローマとヒスパニアの関係の一面を象徴する歴史的事件の精神的ドラマ化が生じる余地があったのだと推測できるだろう。そう言えば、サグントの城砦に向かって民家の間の通りを登っていると、「町の遺産の古代ローマ劇場を守れ」という抗議の幕がいくつも目についたが、この町のローマ文明の保存遺産は、同じエブロ川以南のアリカンテに比べても明らかに乏しい。現在でもサグントの住民は、ローマの同盟としてカルタゴ軍に対して最後まで抵抗し、結局救助の手を差し延べられず孤立無援のまま滅ぼされた2200年前の彼らの祖先と同じようなディレンマの中で生きているのかという思いがした。

（推進担当者・西洋古典学）

第５回国際研究集会『知のテクスト化』発表報告

鎌田隆行

3月4日〜14日、フランスに滞在し、グローバル COE 第5回国際研究集会『知のテクスト化』（3月5日〜7日）に参加して研究発表を行い、その後フランス学士院にてバルザック『セザール・ビロトー』の作品制作資料の調査を行った。

研究集会の全体像については松澤教授より報告が行われているので、私の方では自分の専攻するバルザック研究に関わる点のみ記しておく。

今回、二日目の午前のセッションにおいて、拙論を含む四本の発表がバルザックにおける知のテクスト化を対象とするものであった。バルザックにおけるさまざまな知（歴史、科学、医学、思想など）への依拠は、小説による総体的な社会表象という当時としては未曾有の試みの中で、すなわち十全な先行モデルが存在しない状況で、その表象対象である混沌とした同時代の社会に可視性を与えるための装置である。いささか強引なまでに召還されているさまざまな知はしたがって決して一枚岩にはならず、さながらモザイク状に組み合わされ、時に互いに論理的に矛盾しあってもいる（これに対して、今回の研究集会でも論じられたように、バルザックという「先行モデル」を持つフローベールにおいては、小説中で知に対してアイロニカルな距離が取られている）。そうした多様性や矛盾、曖昧さの絵解きをどう行うかが研究上の魅力となってくる。今回の四本の発表では精神分析、表象論、生成論などの多様なアプローチから読解が行われ、近年のバルザック研究における方法論の展開を反映するものであった。とりわけ『あら皮』における知を論じたジャック=ダヴィッド・エブギー氏（ナンシー第二大学）の発表は、最も総合的な観点からバルザックにおける小説美学の構築のための知の援用の論点整理を行うものであった。またミシェル・アキアン氏（パリ東大学）の発表は精神分析の観点から『谷間の百合』における知の現われを考察するものであり、ローランス・ゲレック氏（パリ・デカルト大学）の発表はバルザックの複数の作品に見られる架空の商業広告文に断片的に援用された科学を論じる、いずれも斬新なものであった。拙論は、『幻滅』初版（1837年）の序文においてバルザックが後に『人間喜劇』の「総序」（1842年）で詳述することになる「科学的」原理に初めて本格的に言及する一方で、そうした意図に相応する作品群の新たな分類（これが後の作品群に対して生成効果を持つ）を練り上げていったことを生成資料に基づいて論じた。

会場には、クレール・バレル=モワザン氏（ティエール財団給費生；CNRS研究員）や滞仏中の大下祥枝氏（沖縄国際大学）、松村博史氏（近畿大学）ら、日仏の尊敬するバルザック研究者の方々が多忙な時間を割いて来聴に駆けつけてくれたことも記しておきたい。

（推進担当者・フランス文学）

第５回国際研究集会『知のテクスト化』発表報告

永田道弘

名古屋大学文学研究科グローバル COE とパリ東大学の共催による国際シンポジウム『知のテクスト化』（3月5日〜7日）に出席し、「フーコーを超えて―新しいルーセル像の読みの試み」の題にて、過去２年間のグローバル COE プログラム（「テクスト布置の解釈学的研究と教育」）における自身の研究成果を発表。私が参加したのは、ミシェル・アキアン女史の司会による、主に20世紀の作家に関する研究発表を集めたセッションであった。ビュトールと音楽を論じたフランシス・クロドン教授（パリ東大学）の「ビュトールと音楽知―『ディアベリの主題による33の変奏曲との対話』」は、文学の枠組みを超えた領域横断的な発表であり、大変刺激的な内容であった。その他にも、ジェラール・コジェ教授（リール大学）が、その数多の著作数にも関わらず、フランス文学史ではあまり取り上げられることのない作家ジャン・ジオノの『屋根の上の軽騎兵』を、コレラといった独特の視点からユーモラスに論じていた（コジェ氏はまた、ルーセルについても研究しており、私も博士論文で彼の論文を引用している。個人的な面識は全くなかった氏と、こうして同じシンポジウムで発表するとは、まさに奇遇といえよう）。

私自身の発表内容は以下の通りである。言語の形式的構造からルーセルを評価する従来の批評は、「手法（プロセデ）」を強調するあまり、ルーセルをルーセルたらしめている奇想がいかにして生まれたか十全に説明していない。「プロセデ」だけで物語の奇矯さの形成すべてを説明することが不可能である以上、物語内容のレベルで働く創作方法を作品の生成プロセスから見出す研究があってしかるべきである。今回の発表では、『アフリカの印象』を同時代のアフリカを題材とした通俗小説のパロディと考え、生成批評の外的生成／内的生成の概念を用いながら、草稿の改訂過程での先行テクストに対する模倣・変形操作のプロセスを検証した。特に黒人王の人物像に焦点をあて、パロディの対象として外部から取り込まれたアフリカの通俗的表象が、執筆を通じて作品の内在的論理によってどのような変容を蒙っていくのかを分析した。このような生成プロセスの分析を通じて明らかにされたものとは、「プロセデ」とは別種の創作方法――作品の外部から紋切型ないしは個人的嗜好に合致するイメージを取り込んで複数のエピソードをつくり、それらを言わばコラージュのように結びつける――であった。このように生み出されたルーセルの奇想は、同時代の通俗小説に内在する人種差別的イデオロギーに対する一種の批判性をも内在したものであることが理解された。

（グローバル COE 研究員・フランス文学）

プロヴァンス大学との学術交流協定締結準備②

重見晋也

平成21年3月9日より3月14日までエクス=マルセイユ第1大学（プロヴァンス大学）とグローバル COE プログラムとの間で締結を進めている博士後期課程に関わる学術交流協定の打ち合わせのため、プロヴァンス大学を訪問した。

打ち合わせは主に同大学国際交流コーディネーターの Amira KHELLAF 氏と行ったが、それに先だって同大学博士後期課程の全体責任者である FANLO 教授を交えて懇談し、今後の見通しなどについて意見を交わした。

今回の打ち合わせの議題となったのは、主としてダブル・ディグリー制度に関わるものであり、同大学が日本の他の大学と実施しているダブル・ディグリー制度について説明を受けると共に、名古屋大学の現状について説明した。ダブル・ディグリー制度の本格的な導入に向けた具体的な取り組みとして、共同論文指導という形でプロヴァンス大学博士後期課程1年に在籍する学生を重見が担当して指導することを確認した。

今回、博士後期課程に関する学術交流協定の内容について合意に達したため、プロヴァンス大学と平成20年度中に正式に協定を交わすことが可能になったことを報告するものである。

（推進担当者・電子テクスト学）

グローバル COE 研究員の就職のお知らせ

グローバル COE 関係者下記2名のアカデミック・ポストへの就職が決まりました。おめでとうございます。
グローバル COE 研究教育員の西村善矢さん（西洋史学）と永田道弘さん（仏文学）が2009年3月31日をもって退職し、同4月1日より、それぞれ名城大学准教授、大分県立芸術文化短期大学専任講師として着任することが決まりました。お二方の今後のいっそうのご活躍を祈念いたします。

事業推進担当者の異動

2008年度をもって事業推進担当者の任を離れた和崎教授と町田教授に代わって、2009年度より新たに3名の先生に研究教育拠点形成に参加していただくことが決まりました。

池内　敏 教授（日本史学）
金山弥平 教授（ギリシア哲学）
大石和欣 准教授（イギリス近代文学）

オープンレクチャー

2008年度末にお休みをいただいたオープンレクチャーですが、4月から再開いたします。4月と5月は本年度より新たに事業推進担当者として本プログラムに加わった、池内敏教授と金山弥平教授にご講演いただきます。

第17回 ● 2009年4月15日㈬　**19世紀の竹島・松島認識について**
18:00～　講師：池内敏教授（日本史学）
第18回 ● 2009年5月13日㈬　**プラトンと文字の功罪**
18:00～　講師：金山弥平教授（ギリシア哲学）
於：名古屋国際センタービル15F グローバル COE オフィス

刊行物の発行

『HERSETEC』Vol. 2, No.1, 2と第2回国際研究集会のフランス語プロシーディングが発行されました。

佐藤教授の最終講義

題目「西洋中世史が解決すべき幾つかの大きな問題」

2009年2月4日㈬14時～15時にグローバル COE 拠点リーダー、佐藤彰一教授（西洋史学）の最終講義が文学研究科237室で行われました。
佐藤教授は2009年度からは名古屋大学特任教授となり、引き続き文学研究科グローバル COE の拠点リーダーとして統括運営を担当します。

グローバル COE 論文賞授賞式

大学院説明会に先立って2008年度グローバル COE 論文賞の受賞者3名への授賞式を執り行いました。

大学院説明会の開催

2009年4月7日14時50分より博士後期課程入学生および在学生を対象に、2009年度グローバル COE 大学院説明会を開催しました。説明会は、佐藤彰一拠点リーダーの挨拶に始まり、グローバル COE が行う2009年度の教育事業を中心に、「グローバル COE 論文賞」、「授業科目：テクスト布置解釈学」、「大学院学生海外派遣事業」、「研究アシスタント募集」について説明を行いました。

また、「大学院学生海外派遣事業」については、2008年度調査計画が採択され U. C. バークレーにて調査を行った玉田沙織さんから、自らの体験に基づいてグローバル COE の派遣事業の意義についてのレクチャーも行われました。

大学院学生海外派遣事業の募集について

2008年度に引き続き2009年度も大学院学生海外派遣事業の募集を行います。本事業は、課程博士論文の執筆に必要な調査を支援するとともに、専門分野における国際水準の研究能力を養成することを目指すものです。審査は二段階選抜により実施し、第1次審査は書類審査、第2次審査は面接となっています。

書類提出期間　2009年4月24日㈮～5月7日㈭16時30分まで
第1次審査結果発表予定：2009年5月15日㈮
第2次審査結果発表予定：2009年5月22日㈮
募集要項　Web からダウンロード
www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp
問い合わせ先　グローバル COE 事務室（文学部講義棟131室）

グローバル COE 研究アシスタント募集

2008年度に学位取得などのために3名の研究アシスタントが職を離れました。それに伴って、2009年度にグローバル COE 研究アシスタントとして活動してくれる博士後期課程の学生を以下の通り募集します。

書類提出期間　2009年4月17日㈮～4月23日㈭16時30分まで
提出書類・応募要項　Web からダウンロード
www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp
問い合わせ先　グローバル COE 事務室（文学部講義棟131室）

事務局から

●グローバル COE オフィス（名古屋国際センタービル）勤務の中島美智代さんが、2008年度をもって退職しました。
●2009年度より新たに水本早奈美さんが事務補佐員として採用されました。現在は東山キャンパスで研修中ですが、6月より国際センタービルのグローバル COE オフィスに常時勤務することになっています。
●グローバル COE ではさまざまな活動をメールで紹介するメールマガジンを発行しています。登録するには、メールを受け取りたいメールアドレスから次のメールアドレスに空メールを送って下さい。

gcoe_infos-join@gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp

SITES II HERSETEC
国立大学法人 名古屋大学 グローバルCOEプログラム
テクスト布置の解釈学的研究と教育 No.5
発行日　2009年4月20日
発　行　名古屋大学大学院文学研究科

名古屋大学大学院文学研究科グローバルCOE事務局
〒464-8601 名古屋市千種区不老町 TEL/FAX 052-747-6461
名古屋大学大学院文学研究科グローバルCOEオフィス
〒450-0001 名古屋市中村区那古野一丁目47番1号 名古屋国際センタービル15F
TEL 052-587-1710 FAX 052-587-1709
web ● www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp　e-mail ● bureau@gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp